ひまわりからのメッセージ

141号
2023.7.10
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

苔むした桜の樹に寄せて……

先日、園内研修会があって古巣のひまわり学園に出かけました。私が勤めていた頃からすると、知っているメンバーは四分の一位になっていましたが、職員の方と共に園内の樹々も私を迎え入れてくれました。私が大好きな桜の樹には苔がびっしりと生えつき、見るからに古木になっていました。「今年もたくさんの花をつけてくれましたよ」と、私の思いを推し測って下さったM先生が報告して下さいましたが、来年はこの園舎ともお別れです。「この樹はどうなるのでしょうか。切り倒されてしまうのでしょうね」と、寂しい会話になりました。

半世紀前には、障がいがあると小学校に通うこともできず、就学猶予、免除という制度が子ども達の学ぶ権利を奪っていました。大垣市では、昭和四十三年に知的障がいのお子さんのための通園施設として川並学園が開園しましたが、肢体不自由のお子さんの施設は後になりました。保護者の方達の願いが叶ったのは、昭和四十七年、「重度肢体不自由母子通園施設」としてひまわり学園が開設されたのでした。

私が赴任した時は脳性小児まひや進行性筋ジストロフィーのお子さん達が通っていて、南小学校と南中学校の肢体不自由学級でもありました。私はそれまで関わっていた子どもたちとは全くちがう子ども達に出会って、自分に何ができるのだろうかとずいぶん悩みましたが、子ども達が多くのことを私に教えてくれました。あらためて命の大切さを学ばせてくれたのも子ども達でした。ひまわり学園の子ども達と出会わなければ、今の私はなかったに違いありません。

満開の桜の下を散歩した日々、散った花びらがじゅうたんのように敷きつめられた園庭で子ども達が歓声をあげたことなど思い出が甦ってきます。そして二十歳を迎えることなく逝ってしまった多くの子ども達のことを私は忘れることはないでしょう。

苔むした桜の樹を見上げつつ感傷に浸った一日でした。みんな、私と出会ってくれてありがとう。学ばせてくれてありがとう。心の中で呼びかけて学園を後にしました。

身近に赤ちゃんがいるご家庭にぜひアドバイスを!!

最近、子どもたちの発達の遅さを嘆く声をあちこちで聞くようになりました。

私が西濃圏域発達障がい支援センターの仕事を県から委託された十五年前にも、すでに各地区の保健センターでは、幼児のことばの遅れに関することが話題になっていましたが、今では、園や小学校で子どもたちの困りがますます増えてきているようです。

その根底には、家族のあり方の変化、地域社会の変化、子どもの遊びの変化、便利になった生活等々色々なことが関係していると思います。

一昔前は子どもたちの困りの気づきを早期に見つけようと考えて「早期発見、早期療育」ということが大切だとされ、一歳半健診や三歳児健診でのお母さん方への働きかけがなされて来ました。赤ちゃんが歩けるようになる頃に「マンマ」「ブーブ」など意味のあることば（初語とか始語と言われます）が出てくるのが発達の定型と考えられるのですが、現在では、始語が一歳半でも出ていない子どもの数が出ている子どもの数よりも多くなってきている現実があります。実は、このことは非常に困ったことだと私は考えています。

ことばの刺激、ことばのシャワーを赤ちゃんに!!

子どものことばは、どのように発達してくるのでしょうか。実は、子どもが「マンマ」「ブーブ」を話し出すためには、ことばの理解は一〇〇語が必要だと言われています。では、ことばの理解をふやしていくためには、どんなことが必要でしょうか。それはことばを話して聞かせることと言っても良いと思います。

生後三ケ月までの赤ちゃんは泣くことはあっても、自分から笑いかけたり、声を出してママを呼ぶことはありません。この時期こそ、ママやパパからの一方的なことばかけが必要です。つまり「ことばのシャワー」を赤ちゃんにかけてほしいのです。おむつを替える時「くさいくさいの出たね、替えようね」「ほら、気持ちよくなったね」とか、授乳の時に「おなかすいたね」「たくさん飲んで大きくなってね」「良い子ね」等々のママからのことば

を聞くと、赤ちゃんは微笑み返しをしてくれるはずです。そして四ヶ月になると、体も対称位になってこようとし、自分からママへ声を出して話しかけるようになってきます。

この生後四ヶ月の時に赤ちゃんの方からの働きかけが見られない場合には、もしかしたら「ことばの刺激」が少ないのかもしれません。そうしたら、スマホは少し見るのを減らして子どもさんに関わってあげて下さい。

ただし、自分の方から関わってくるようになったら、一方的なことばのシャワーではなく、赤ちゃんの声や手の動きなどに対して、それに応じる形でことばを返していくようにしましょう。

赤ちゃんからママへの働きかけが少ない場合には、もっと関わる必要があるのだと考えてほしいのです。ことばは、「この人に話しかけたい」「この人にわかって欲しい」という気持ちが大切です。そして赤ちゃん時代からの「やりとり」がその後のお子さんのことばの発達につながっていくのです。

皆さんの身近に赤ちゃんのいるご家庭があったら、乳児期のことばの大切さを是非伝えて下さい。

高等学校における通級指導について

赤ちゃん時代にことばが遅いと、それから後のことばの発達が遅くなることもあり、そのことで友だちとトラブルになったり、社会性の発達が遅れたりすることもあります。そんなケースには通級の利用が勧められますが最近は高等学校にも通級教室が置かれるようになってきました。けれども小、中学校の通級とはちょっと異なります。

中学校までのように特定の課目のときに通級に行くと、高校では単位が取れなくなってしまう可能性があります。そのために「加える指導」として設定したり、選択科目の一つとして設定するといった工夫がなされています。通級では「自立活動」が行われ、心理的な面のフォローはスクールカウンセラー（SC）の役割になっています。

生徒の困りの要因

高校生にもなると、困難さは発達障がいの症状以外にも二次的な問題が複雑にからんできます。今までの苦い経験から人間不信になったり意欲を失ったりしている場合もあります。その上、思春期や青年期は精神

疾患の好発期にもなるので医療との連携は小中学校の時より多くなってくるでしょう。

指導の内容

通級指導で行われる中核は自立活動ですが、その中でも特に重要となるのは、将来の具体的なイメージをつかむこと、卒業後の生活に必要となることの基本を身につけることになるでしょう。

自分にできることと困難なことを知って自己理解を深め、必要な援助を求めるスキルや自分に合った進路選択などは、高等学校の通常の教育課程にはありませんから、通級でこそ取りくむ課題だということになるでしょう。

高校生にもなれば、自分のことを自分のことばで一生懸命に話そうとするでしょうが、実際に自分のことがわかっているかというと、そこはまだまだでしょう。基本的な生活習慣や心身の健康保持に関すること、障害の理解、コミュニケーション、興味、関心、自分の強みや弱み、学力など一緒に考えて、本人の同意を得た上で通級指導を始めることになるでしょう。

例えなりたい自分があっても、実態にそぐわない目標では上手くいきません。以前、自分の能力以上に自分を過大評価して、他人からのアドバイスに対して全く聞く耳をもたない学生がありましたが、結局は就労もうまくいきませんでした。いつも口がすっぱくなるほど言っている自己理解は、高校生になったからではなく、子育ての過程の中で折にふれて家庭内の話題にしていくことが必要なのだと思うのですが、なかなか難しいのでしょう。

時には、本人の願いと保護者や担任の願いや不安と異なることもあるでしょうが、通級での個別の指導計画の作成は本人のモチベーションが下がらないように工夫されていくと思います。

高校と関わらせていただくようになって、それぞれの校風によっても、在籍する生徒さんたちによっても、雰囲気がずいぶん違うことを実感しています。進学先を決める前にその学校の校風なども知っておかれるといいですね。

8月の予定

- センター親の会は休会です。次回は9/11(月)です。(スイトピアセンター)
- ひまわりの会(ピアサポート)は8/10(木)午後1時～ソフトピアセンター
- 家族会は8/26(土)ソフトピアセンター